

靖國神社 遊就館

YASUKUNI JINJA
YUSHUKAN



貴重な史資料が

真実を語り継ぐ。

明治十五年我が国最初で最古の軍事博物館として開館した遊就館は、時にその姿は変えながらも、一貫したがあります。一つは殉国の英霊を慰霊顕彰することであり、一つは近代史の真実を明らかにすることです。

近代国家成立のため、我が国の自存自衛のため、更に世界史的に視れば、皮膚の色とは関係のない自由で平等な世界を達成するため、避け得なかった多くの戦いがありました。それらの戦いに尊い命を捧げられたのが英霊であり、その英霊の武勲、御遺徳を顕彰し、英霊が歩まれた近代史の真実を明らかにするのが遊就館の持つ使命であります。

十萬点に及ぶ収蔵品の中から、英霊のご遺書、ご遺品、歴史を語り継ぐ貴重な史資料を展示する遊就館からは、英霊のまごころ、そして近代日本の真姿が浮かびあがります。



■展示室⑧ 日露戦争から満洲事変



■展示室③ 明治維新



■展示室⑱ 靖國の神々2



■展示室⑬ 大東亞戦争3

館名の由来
中国、戦国時代の儒者荀況の著『荀子』勸学篇の「君子居必擇_ル郷、遊_ニ必就_ニ士_一」より「遊」「就」の二字を撰んで命名したもので、高潔な人物に就いて交わり学ぶの意である。



のこころ・日本の武の歴史/展示室①②



■水戸藩主 徳川齊昭の陣羽織

どしくそく
具足



■元帥刀



■脇差 包丁正宗



■トラ・トラ・トラ電文

大東亜戦争
展示室⑪⑫⑬⑭⑮



■山本五十六長官愛用双眼鏡



■河南大将の遺詔と遺書



■真珠湾九軍神写真



■染めの日章旗



■日章旗への寄せ書き

映画上映(2階映像ホール)



■企画・制作 日本会議・英霊にこたえる会
■後援 靖國神社

日清・日露の大戦から大東亜戦争まで…。我が国近代史の戦争の歴史を、当時の貴重な映像で再現し、東京裁判で歪められた歴史の真実に迫るドキュメント映画。(50分)

日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦
満洲事変・支那事変/展示室⑥⑦⑧⑩



■橘中佐着用の軍服



■日清戦争錦旗



■敵弾が貫通した歩兵銃弾



■肉弾三勇士のレリーフ



のぎまれすけ
■乃木希典像



■東郷平八郎像



■ 錦の御旗



■ 坂本龍馬命肖像

明治維新・西南戦争/展示室③④



■ 官軍発行の
投降勧告書



■ 白熊毛頭・赤熊毛頭



■ 吉田松陰命坐像



えのもとだけあき
■ 榎本武揚軍服

武人の



■ 色々威具



■ 奇跡の椰子の実



■ 金城姉妹の遺品

遺書・遺品
展示室⑬⑭⑮



■ 西沢都彌命手製のアルバム



■ 鉄血勅皇隊遺



■ 阿



■ 女子挺身隊血



■ 英霊に嫁いだ花嫁人形



■ 須賀芳宗命遺品



■ 安原正文命遺書



■戦跡収集品



■ロケット特攻機「桜花（一型）」



■艦上爆撃機「彗星」



■九七式中戦車



■人間魚雷「回天（一型）」



「写真協力（株）近代出版社」



■茶房「結」



■売 店



■玄関ホール

遊就館拝観のご案内



【開館時間】

9:00～17:00

(入館は閉館の30分前まで)

【休館日】

年中無休(6月末、12月末に数日間の臨時休館日があります)

【拝観料】

大人／800円

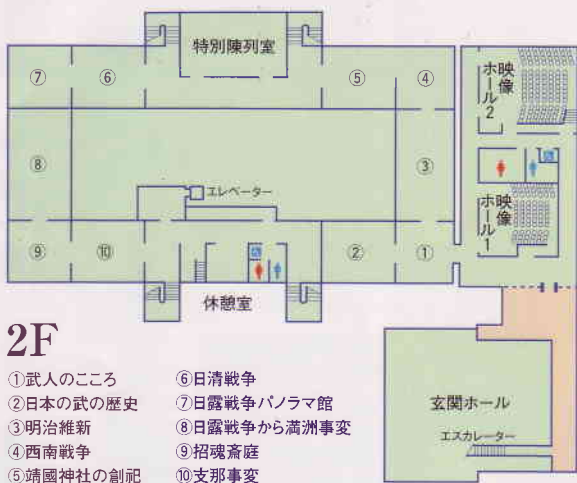
大学生／500円

中学・高校生／300円

小学生／100円

※20名以上の団体は2割引となります。

※障害者手帳保持者は無料です。



2F

- ① 武人のこころ
- ② 日本の武の歴史
- ③ 明治維新
- ④ 西南戦争
- ⑤ 靖国神社の創祀

- ⑥ 日清戦争
- ⑦ 日露戦争パノラマ館
- ⑧ 日露戦争から満洲事変
- ⑨ 招魂斎庭
- ⑩ 支那事変

玄関ホール
エスカレーター

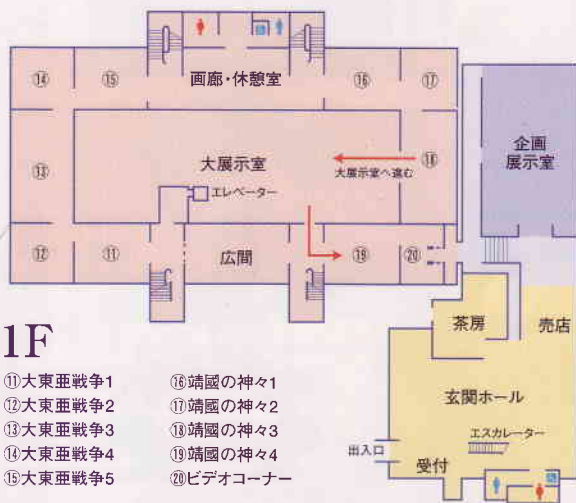
遊就館への交通ご案内

【JR】総武線・中央線市ヶ谷駅、飯田橋駅からいずれも徒歩8分

【地下鉄】東西線…九段下駅から徒歩8分 都営新宿線…九段下駅から徒歩8分

半蔵門線…九段下駅から徒歩8分 南北線…市ヶ谷駅から徒歩8分

有楽町線…市ヶ谷駅、飯田橋駅からいずれも徒歩8分



1F

- ⑪ 大東亜戦争1
- ⑫ 大東亜戦争2
- ⑬ 大東亜戦争3
- ⑭ 大東亜戦争4
- ⑮ 大東亜戦争5

- ⑯ 靖国の神々1
- ⑰ 靖国の神々2
- ⑱ 靖国の神々3
- ⑲ 靖国の神々4
- ⑳ ビデオコーナー

企画展示室

茶房 売店

玄関ホール
エスカレーター

館内施設のご案内

1F 茶 房…軽食と飲み物をご用意しております。

1F 売 店…記念品、出版物などを取りそろえております。

拝観の思い出にご利用ください。

車イスのご利用…1F受付でお申し込みください。

注意事項

- 館内での写真・ビデオ撮影・録音はお断りします。
- 館内は禁煙です。
- 飲食物・ペット・危険物の持ち込みはお断りします。
- 他の拝観者の迷惑となる行為は禁止します。
- 不審者・不審物を見つけれたら速やかにお近くの係員にお知らせください。

靖国神社 遊就館

〒102-8246 東京都千代田区九段北3-1-1 TEL.03(3261)8326 FAX.03(3261)0996

URL:<http://www.yasukuni.or.jp/>

靖國神社遊就館^{ゆうしゅうかん}

戦歿者と同じく故郷に思いを馳せ、故郷出身の戦歿者を誇りに思う。

故郷の護國神社



秋田縣護國神社の御社頭

平成18年3月1日～平成19年1月31日

遊就館 企画展示室

- 開館時間 9:00から17:00
(入館は閉館の30分前まで)
- 休館日無し
但し、6月26日から28日・12月下旬は、館内整備のため臨時休館致します。

- 拝観料
大人 200円
大学生 100円
高校生以下 無料
(常設展拝観者は無料)
- 常設展拝観料
大人 800円
大学生 500円
中高生 300円
小学生 100円

遊就館への交通ご案内

【JR】総武線・中央線市ヶ谷駅、飯田橋駅からいずれも徒歩8分

【地下鉄】東西線・・・九段下駅から徒歩8分 都営新宿線・・・九段下駅から徒歩8分

半蔵門線・・・九段下駅から徒歩8分 南北線・・・市ヶ谷駅から徒歩8分

有楽町線・・・市ヶ谷駅、飯田橋駅からいずれも徒歩8分

お問合せ先

靖國神社 遊就館
〒102-8246 東京都千代田区九段北3丁目1番1号
TEL: 03 (3261) 8326
URL: <http://www.yasukuni.or.jp/>



特別展「故郷の護國神社」

ご挨拶

愛する祖国、愛する故郷、愛する家族のために、この世では再びは受けることのない尊い命を捧げられた英霊にとつて、故郷とは何だったのでしょうか。戦地では美しい故郷の風景を思い描き、故郷に残してきた家族の面影を偲んだことでしょうか。そして故郷を誇りに思い、美しき故郷を守るために戦ったことでしょうか。英霊は愛する家族、美しき故郷、高貴なる祖国の明るい明日を信じて、生命を捧げられたのではないのでしょうか。

全国にはかつて内務大臣告示によつて指定を受けた護國神社が五十二社あります。今回の特別展では、英霊の故郷に鎮座する護國神社を紹介し、その護國神社に御縁深い英霊の御遺品を展示致しております。英霊のまごころ、その御心に応えようとする、故郷の護國神社のことに思いを馳せていただければと存じます。

ご家族、お知り合いの方々と
お誘いあわせの
上、ご米館下さ
います様、心よ
りお待ち申し
上げております。



舊松花館

明治神宮・靖國神社献饌講

故郷の作物を故郷出身の英霊に献じたい。遺族崇敬者のこの気持ちは靖國神社、護國神社への沢山のお供え物に表れている。「明治神宮・靖國神社献饌講」は神饌を捧げる大きな講組織である。

昭和十七年十二月三十日、茨城県前渡村の磯崎忠五郎村長、黒澤忠治氏を始めとする同志一行は明治神宮の御神徳と護國の英霊に感謝の真心を捧げたいとの念願から、近郷の篤農家を募り祭典の神饌として鏡餅、鯛、野菜を奉納する、「茨城県献饌会」を組織した。爾来終戦前後の食糧事情の悪化等の中においても、年間を通じて神前にお供えするお米の奉納は絶えず続けられた。昭和二十二年一月二十三日、名称を「明治神宮・靖國神社献饌講」と改め、初代講員に黒澤忠治氏が就任した。昭和二十三年には「二年目をむかえた靖國神社にまたまつ」に、郷土民謡「磯節」を奉納し、また十年間に恒り花火を奉納すること



神前に献ずる饌餅を調製する講員

を誓い、それを実行した。その後も「明治神宮・靖國神社献饌講」からのお米の奉納と饌餅のお供えは、大東亜戦争終結六十年を過ぎた現在も続けられており、英霊に感謝の真心を捧げたいの思いも継承されている。

献饌者 茨城県の日立・水戸・大洗・東海・小川・玉里・常陸大宮・旧勝田中根・旧那珂湊・那珂・常陸太田・旧勝田の各地区の篤志農家三千名

故郷の御酒

「全国靖國献酒会 甲東会、恒例奉納会社」英霊の故郷には必ず故郷の御酒、地酒がある。故郷の人々が精魂籠めて育ちたお米と故郷の清水とで丹念に醸造された御酒である。武運長久を祈った氏神様との神酒、出征の宴席での御酒、故郷の御酒と英霊とは切っても切れない。平和な今、英霊の御心に応えようと「全国靖國献酒会」と「甲東会」が組織されている。

「全国靖國献酒会」は、北は北海道から南は沖縄まで、日本酒を中心として、焼酎、ワインを醸造する会社約四百社で組織されている。靖國神社の春秋例大祭、新年祭、みたま祭、良酒醸造祈願祭など祭典と共に、英霊の故郷の御酒がご神前にお供えされる。「甲東会」は灘・伏見の酒造会社十一社で組織され、日々奉仕される日供祭の神酒、新年の梅酒を奉納する。



正月境内に飾られた御酒

その他、ビール、ウイスキー、味噌、醤油などの醸造品が恒例奉納会社より英霊にお供えされる。懐かしい故郷の香りと味に接して英霊のお慶びい

靖國神社献華協會

白梅を戦闘にさして進軍する兵隊、女子学生に桜の小枝を贈られて出撃する特攻隊員「散鳥のやまと心を人間はば朝日に匂ふ山くく花一本居賞長」散るが故に美しく匂う花。故郷でよく見た花に微笑み英霊、初めて見る珍しい花に見とれる英霊。護國の英霊に生花をお供えし、奉還願の真心を捧げたいと願う組織がある。「靖國神社献華協會」は、昭和十一年から同二十一年まで、境内に華席を設け春秋例大祭で奉納されたのが始まりである。戦後日本中が困窮状態となったとき、神社の近隣を中心に各地で神社を支えるための自主的な講組織が結成されはじめた。そんな中、御祭神に生花をお供えするための「献華靖國講」が結成され、春秋例大祭、新年祭、みたままつり、ひな祭、端午祭に献華奉納が始められた。そして昭和二十七年、現在の「靖國神社献華協會」が設立され、その年の秋季例大祭では二瓶の献華が行われた。昭和二十九年にはガラス戸建具付の華席が新設され、常時献華を実施することとなった。昭和三十四年、靖國神社御創立九十周年全国名流いけばな展が開催され、昭和三十九年にはオリビタ協賛各流家元生花展が開催された。昭和四十四年、靖國神社御創立百年記念にあたり奉還花展が行われ七十六瓶が出品された。平成十一年十月には靖國神社御創立百二十年を記念し、遊就館に奉納した大型の献華は大変な好評を得、平成十四年の新生遊就館開館に際しても



各社中から贈ることなく供えられる拝殿前の華席

大型の生花が奉納され、大いに注目を集めた。流派を越え御祭神奉還願影のために結束し奉納された生花は、創立から五十年間にわたり実に十萬瓶を越しており、その瓶数はいけばな界でも秀でた数である。また設立当初から今日まで継続している会員流派は二十流派近くあり、平成十四年の結成五十周年記念式典では今後会員結束のもと、心のこもった献華を末永く継承していくことを確認し合っている。

軍旗と聯隊と故郷と

全陸軍の半数を占める歩兵聯隊と騎兵聯隊の創設に当たっては、軍旗聯隊授式が行われ、陛下は旗の軍旗を親しく聯隊長にお授けになられた。これを拝受し、勅語を賜った聯隊長は「敬ミテ明勅ヲ奉ズ 臣等死力ヲ竭クシテ 誓ワテ国家ヲ保護ス」と奉答するのが常であった。

近衛歩兵第聯隊以下、昭和二十年八月十五日までに三十三旗が親授された。終戦により軍旗は陸軍大臣命令で奉焼を命じられた。終戦以前に奉焼、海没した軍旗は二十九旗を数えるが、焼たりとも敵国の手に委ねていない。郷土出身の兵隊で構成される聯隊は、栄えある軍旗を保持し、国家の名譽とともに故郷の名譽をかけて戦った。



歩兵第39聯隊軍旗と旗竿

護國神社の概要

わが国では明治の御代になり、幕末維新の戦役・国事に殉じた方の慰霊祭が各地で行なわれ、招魂社が創建されたのが護國神社の起源である。明治七・八年には内務省達により官費が支給され「官祭招魂社」となり、「招魂社」は之を護國神社と改称す。昭和十四年四月一日施行(昭和十三年内務省告示)に基づき、「護國神社」と改称され、内務大臣指定護國神社と指定外護國神社の二種に分類された。大東亜戦争終戦後、護國神社は占領軍の監視、攻撃を受け、存亡の危機に立たされ、領德神社(千葉縣護國神社)・櫻山神社(茨城縣護國神社)の如く「護國神社」という社号さえ変更しなければならなかった苦難の時代があった。神職・遺族・崇敬者は必死の覚悟で御社を守り通し、占領解除後社号は「護國神社」と復称し、国民、県民の崇敬は拡まつて行つた。

旧指定護國神社五十二社は、「靖國神社及び全国の護國神社相互の連絡を緊密にし、祭神の奉斎、祭祀の厳修に万全を期すること」を目的とし「全國護國神社會」を組織している。北海道や岐阜県・兵庫県・広島県・鳥根県のように一県内に複数存在するところもあるが、建設中に戦災で焼失した神奈川県戦後、戦没者慰霊堂が建てられたや、東京都など、存在しない県もある。

護國神社の祭神は靖國神社から分祀されたのではなく、独自で招魂し祭祀を執り行っているため、靖國神社とは同列の関係であつて上下の関係はない。招魂合祀は各護國神社独自で実行しており、自衛官・警察官・消防官などの公務殉職者を合祀している護國神社もある。



靖国神社奉納 240号油絵 「ヒ八六船団」 帰らず

この油絵は、大東亜戦争に於ける海上輸送戦の実情を伝えるため、昭和61年10月13日、財団法人日本殉職船員顕彰会と、海防艦顕彰会より、靖国神社に奉納されました。

佐藤幹児画伯の作で、240号(横409cm×縦152cm)の大作です。

昭和20年1月12日、印度支那半島東岸に於て、「ヒ八六船団」(タンカー4隻、貨物船6隻)、護衛艦(第百一戦隊——「香椎」、海防艦5隻)は、南方の石油、重要物資を満載し、帰国途次、米国

主力機動部隊艦載機の反復攻撃を受け、終日に及ぶ防戦も空しく、海防艦3隻を残し、全滅しました。この絵は、その情景を画いたものです。

南支那海に侵入したこの機動部隊は、更に「第一海防隊護衛補給船団」「サタ〇五船団」「ヒ八七船団」等を攻撃し、我が国は合計艦艇11、船舶48隻の大損害を受けました。

この後も、決死的な南方輸送が行われましたが、殆ど成功せず、南方との重要輸送路を断たれた我が国は、石油、資源が枯渇し、国力を失いました。

大東亜戦争 海上輸送の戦い

昭和十六年十二月八日、米、英、蘭と開戦し、西太平洋、東印度洋の各地を占領した我が国の兵員、物資の輸送は、広域かつ莫大な量で、大東亜戦争中期以降は、これらは総て敵の制海・制空権下の海上輸送によらなければなりませんでした。

ところが、第一次世界大戦の苛烈な英、独海上輸送戦の実例があつたにも拘らず、我が国は海上輸送戦に対する認識が薄く、護衛艦艇、護衛航空機等の海上輸送戦に対する準備を、殆どしていませんでした。

開戦当初は、敵の体勢も整わず、船舶の被害は軽微でありました。しかし、敵の潜水艦、機動部隊航空機等による反撃が始まり、昭和十八年末より、船舶の被害は増大し、昭和十九年六月には、西太平洋の殆どの海上輸送路を失い、昭和二十年一月、敵機動部隊の南支那海侵入により、シンガポール―門司間の、南方との輸送大動脈を断たれました。更に同年初夏には、敵の機雷によって、我が国の主要港湾を封鎖され、終戦時の我が海上輸送路は、日本海の一部を残すのみでした。

海上輸送の漸減により、我が国の石油等の物資、食糧は不足し、我が占領地の戦力、国内の生産力は低下し、終に我が国は戦う力を失いました。

戦中、海防艦等の護衛艦の建造が急がれましたが、その就役は殆ど昭和十九年以降で、また標準型船舶等も大量に造られましたが、米国に及びませんでした。

敵潜水艦のみならず、敵機動部隊、基地航空機の横行する海上を、我が船員及び海上護衛兵員は、不眠、不休、苛酷な居住に耐え、決死的な海上輸送を行いました。が、海上輸送路を守ることは出来ませんでした。

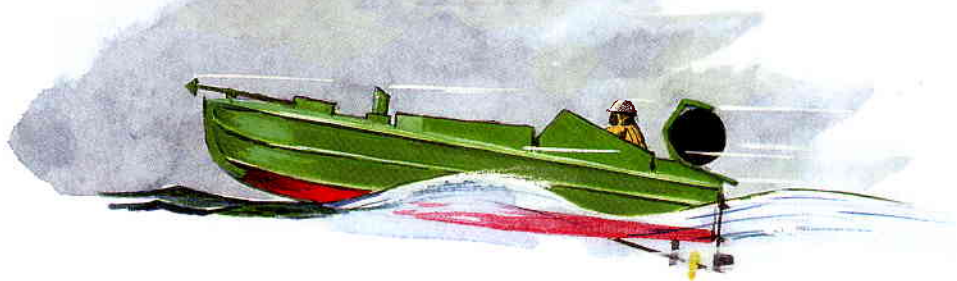
我が国は、当初五百九十九万総トンの船舶を保有していましたが、戦中四百七十一万総トンを加え、八百九十万総トン（二千五百三十四隻）を失い、終戦時には、僅かに百八十一万総トン（損傷大）を残すのみでした。船舶の被害は、敵潜水艦によるもの千百五十二隻、敵航空機八百三十八隻、機雷三百五十七隻、海難その他百八十七隻です。（五百総トン以上の船舶）

船員の殉職六万人、護衛関係兵員及び輸送途次の戦死、殉職者は数十万人に及ぶと推定され、沈んだ艦船、及びこの積荷の損害は、莫大なものでした。

我が国は島国で、食糧、資源は自給自足でできず、殆ど海外より輸入し、製品の多くを輸出して、国民の生計を維持しなければなりません。故に、世界各国が自由貿易を守り、しかも海上輸送が安全であることが望ましいことを、国民は忘れてはなりません。（海防艦顕彰会）

陸軍が行なった海上特攻

米軍を震撼させた挺進爆雷艇①



昭和19年2月、戦局は米軍のマリアナ諸島・ニューギニア西部への進出により、フィリピンも敵目前に晒され、やがては沖縄侵攻も予測されるなど、きわめて日本は憂慮すべき状況にあった。すでに日本の航空戦力の消耗は甚だしく、敵の進撃を阻止するには、敵船団を上陸前に撃破する以外になかった。ここにおいて、同年7月陸軍海上挺進戦隊が結成されたのである。

その任務は、泊地にある敵船艇に250キロの爆雷を装着したベニヤ製のモーターボートの夜間奇襲による肉迫攻撃を加え、一艇をもって一船を屠ることであった。

結成された陸軍海上挺進戦隊は、隊長には陸軍士官学校51期から54期の若い少佐と大尉があたり、中隊長には陸軍士官学校57期を主体とした中尉がその任に就いた。群長(小隊長)には18年12月に学徒出陣した船舶幹部候補生第11期を主体とし、12期の見習士官及び各地の陸軍予備士官学校等出身の見習士官が任に就き、一般隊員としては、当時16歳～18歳の船舶特別幹部候補生が主であった。戦闘の主力をなしたのは、この年若い少年兵たちであった。

全軍より選抜された、この16歳から25歳の若き精鋭たちは昼夜を分かたぬ猛訓練の後、19年10月、30コ戦隊の編成をもって、おのおの最後の決戦地、フィリピン・沖縄・台湾に展開を完了した。

陸軍海上挺進戦隊は国軍の大きな期待を担って、短期間の訓練の後、不慣れな海上において無防備の特攻艇を操り、敵船艇を撃沈すること数十隻という赫々たる戦果を挙げた。生還を期することのできない任務であり、当時は隠密部隊として、まったく世に発表されないままに終戦を迎えている。

青春のすべてを擲って鬼神のごとき攻撃を敢行し、再び帰らざるもの1,636名の多きに及んだ。陸軍海上挺進戦隊の業績は、その家族と国を憂う純粋な心とともに、永く青史にとどめなければならない。

陸軍海上挺進戦隊



原田重穂 画

■ 発足の経緯

昭和18年9月29日、船舶部隊の拡大にともない、船舶兵種を創設し、同年11月船舶特別幹部候補生制度が設けられた。この頃、落下傘部隊の菅原久一大尉（陸士51期のち海上挺進第10戦隊長）が、自ら率いて敵にあたるため、速力五十節くらい的高速艇の作製を陸軍省に意見具申した。中央部はこの種決死兵器には同意しなかった。

昭和19年4月、陸軍船舶司令部（広島市宇品）内で、鈴木宗作司令官以下関係者の間に、海上の防衛は航空部隊のみに任せることなく、船舶部隊自らの手で実施すべきだとの意見が強まった。そのため簡単に軽量の攻撃艇を、あらかじめ敵の予想上陸正面に配置し、奇襲によって上陸船団を側背から攻撃する着想をたて、野戦船舶本廠に舟艇の試作を、また戦法等について船舶練習部にそれぞれ研究を担当させた。

また、これとは別に、大本営陸軍部でも、この目的のため、兵器行政本部と第十技術研究所に、肉迫攻撃艇の開発を命じていた。19年7月海軍の四艇と陸軍の試作艇の比較試験を行ない、各種の要件を充すことで、第十技術研究所の試作になる甲一号型を採用することに決定した。

この艇は、長さ五・六米、幅一・八米、吃水〇・二六米、満載排水量約一・五噸、最大速力二〇～二四節、航続時間三・五時間、二五〇疋爆雷一個装備のベニヤ板製の半滑走型で、秘匿名称を連絡艇①と称した。中央部では肉迫艇の意味を込めて②と称していた。昭和19年8月十ヶ戦隊の仮編成が小豆島船舶特別幹部候補生隊において完了、豊島における③の訓練が開始された。

■ 部隊運用の構想

絶対的な制空制海権下に進攻作戦を展開している米軍に村し攻



撃必成を期するため、次の運用方針が定められた。

現地最高指揮官（通常軍司令官）が直轄して運用する。これは、一局部の戦況に眩惑されず、敵の上陸企図を的確に捕え、つとめて多くの攻撃艇を一斉に統一使用するためであった。とくに、初回の使用時期の判断は、当該作戦軍のみならず全陸軍同種部隊の命運をも左右すると考えられた。

企図の秘匿を絶対の要件とする この着想は、陸軍にとり有史以来の新企図であり、一たび敵に暴露すれば、この艇の脆弱さと自衛能力の不足から、容易に対応の処置を講じ得られるものであった。これがため、国内における艇の製作装備はもとより、この種部隊の存在・配置・戦法等全般にわたり、企図を秘匿することが作戦成功の絶対的要件であった。

基地の秘匿、掩護の強化 ①部隊は、泊地に進入して来る敵輸送船もしくは軽艦艇を目標とした。一方艇の航続力の制約から、部隊の展開は当然予想敵上陸正面付近に限定された。したがって徹底した敵の砲爆撃による制圧に耐えることが必要であり、このため基地の秘匿と掩護は絶対的なものであった。

攻撃は、大量による奇襲とする 敵は通常膨大な戦力を投入して上陸を強行する。これに対し期待する効果をあげるためには、大兵力を投入し、かつあらゆる方向から同時に攻撃を行ない敵の対応を困難にする必要がある。また既にのべた艇の特性から、夜間における奇襲によることを必須の要件としていた。

攻撃の要領 戦隊長の指揮のもと、軍の命令に基づき、日没後に舟艇を泛水し、一コ戦隊（百隻）または一コ中隊（三十隻）ごとに航行、敵の護衛又は警戒艦艇に遭遇した場合は、その一部をもつて体当たり攻撃を行わせ、主力の舟艇群をもつて目標に突進、三ないし九隻が一団となって攻撃を実施する。

陸軍海上挺進戦隊の活躍

㊦部隊は、困難な海上輸送を克服し、敵上陸前に予想上陸正面に作戦展開を一応終了した。しかし、敵上陸点を的確に判断し、適切な作戦展開を実施することは至難であった。また、敵のリンガエン湾上陸作戦における我が㊦部隊の睥目すべき戦果は、米進攻軍をしてかえって徹底した対抗策を強化させる結果となり、比島ついで沖繩戦における㊦部隊のじ後の運用をきわめて困難にした。また㊦は夜間混乱した海上において、通信連絡の手段も有せずかつ視認しにくい小艇であることから、その戦果の確認は甚だ困難なものがあつたが米軍の資料によりその戦果を確認することができる。

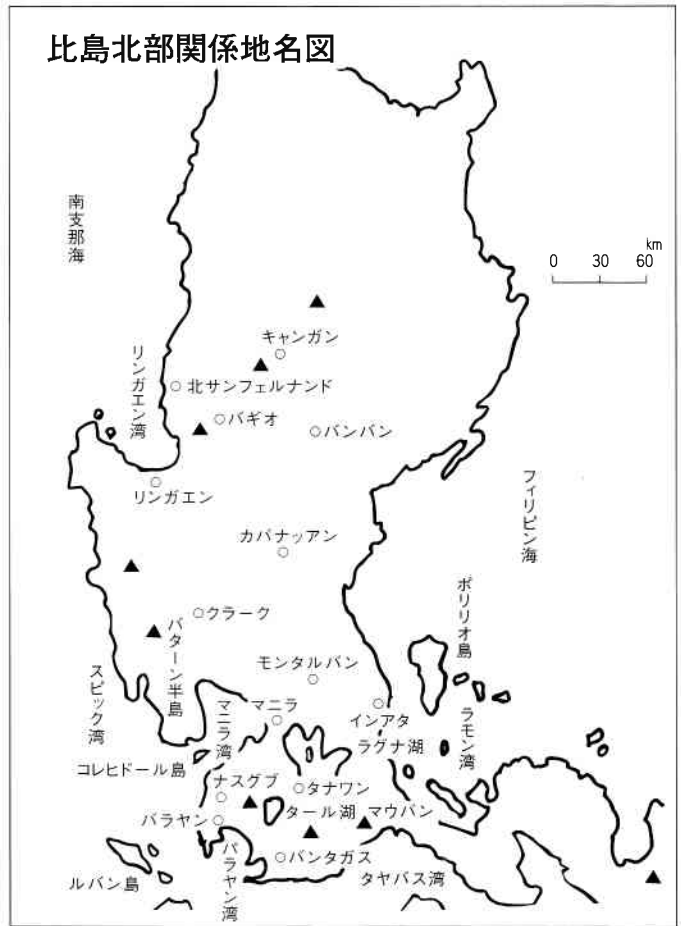
比島における特攻作戦

昭和20年1月9日、セオドア・S・ウィルキンソン中将指揮の進攻部隊が、ルソン島リンガエン湾に上陸を開始した夜、同地区のスワルに展開していた第十二戦隊（戦隊長高橋功大尉・陸士54）は、約四十隻（一説では七十隻）をもつて出撃を行ない、翌10日午前3〜4時頃、米軍の輸送船および上陸用舟艇を攻撃、多大の戦果をあげ生存者僅かに二名を残し他は全員戦死した。米軍資料にもとづく戦果は（リチャード・ネオール著「特別攻撃隊」による）、次の様に記されている。「03・58、アメリカ戦艦コロラドは、一六二五噸の戦車揚陸艦LST 925からの緊急通信を受けた。『敵魚雷艇により被害を受く、浸水が激しい』『救助艇送れ』LST 925の周辺には、少なくとも三隻の㊦艇から至近距離に爆雷

が落とされ、戦車揚陸艦は水線付近に穴があき、右舷エンジンが破壊された。彼等はこの目標に体当たりはしなかったが、正確に教範通りの攻撃を行った。㊦艇は二十節の高速で艦尾から突っ込み、一隻は右舷に一隻は左舷に、また一隻は艦尾四十米位で爆雷を落とし、四秒後信管が爆発するときに、最も効果ある艦中央と艦尾の舵とスクリュー付近で爆雷を爆発させるのに成功し、急転蛇して暗闇に消えて行つた。しかし、大部分の㊦艇は直進して体当たりし、爆雷が直接目標の至近距離で爆発するのを確実にした。

このような攻撃が、LST 1028にも加えられ爆発が艦底で起り、エンジン部に海水が激しく流れ込んだ。付近にいた二隻のLSTと六、二〇〇噸の輸送船ウアー・オークも各一隻の㊦艇の攻撃を受け、輸送船は魚雷により被害を受けたと報告し、船長は船を見捨てる決心をした。ウアー・オーク号の舷側に三・六米の破口があき、七十三名の負傷者が救助された。04・00直後に、魚雷艇（筆者注㊦艇のこと）による攻撃の警報が、連合軍艦隊に発令された。駆逐艦フィリップは、突入してくる㊦艇を二十三米前で二〇ミリ砲で撃破し危険を回避した。艦艇でござつたがえした泊地では、回避運動をすることができなかった。05・00頃までに生き残つた㊦艇は退去したが、損傷がひどく攻撃再興は不能であつた。日本側は二十乃至三十隻の艦艇を撃沈または大破したと主張した。集計すると上陸船団は沈没六隻、大破二隻、損害八隻で計十六隻で日本側の主張に近い被害を受けている。この損失は、アメリカ海軍にとっては重大なものであり、比島南部に展開していた魚雷艇隊を至急北西方面に移動し、輸送船団泊地の防衛力増強

比島北部関係地名図



をはかった。この攻撃後、生き残った日本兵の行動から、『リンガエンの決死的遊泳者たち』と言う神話が生まれた。裸の遊泳者が後に爆薬を綱で曳いて攻撃してくるのを、アメリカ軍の水兵はナイフと短銃で阻止した。

米軍では、リンガエン湾における①艇の攻撃から四日後に、海軍のPT（哨戒艇、魚雷を通常装備せず、四〇耗・三七耗・二〇耗砲や重機関銃及びロケットを装備）と航空機とで徹底した哨戒を開始し、また特攻艇等の秘密基地を破壊するため隠密に行動するカクタス海軍部隊を編成し、一方フィリピンのゲリラ部隊をその探知に使用した。

昭和20年1月31日、米国第十一空挺師団の連隊戦闘団規模の部隊が、マニラ湾のやや南のナスグブ沖に上陸準備を開始したとき、ナスグブ北西四十軒の基地から第十五戦隊第二中隊長上野義現中尉(陸士56)の指揮する一コ中隊が、またその南から戦隊の一部が出撃し船団泊地を攻撃した。この地域は、海岸が急傾斜で、24・00の高潮を待つて揚陸をするべく、上陸軍旗艦スペンサーと駆逐艦二隻が一般哨戒につき、海岸から五哩沖に駆逐艦三隻、対潜哨戒艦一隻と駆逐艇一隻とで、また駆逐艦二隻を船団付近に配備した。22・35頃、駆逐艦が満月の海上を二十隻の①艇が一行隊形で前進するのを発見し警報を発した。駆逐艦が①艇を砲撃する前に、駆逐艇が高射機銃と七六ミリ砲で②二隻を撃沈したが、三隻目の①が駆逐艇の中央に衝突し、水線に二米の穴があき、転覆沈没した。その後①艇は小グループに分かれ、駆逐艦の攻撃を試みたが、米艦艇によって①艇は大損害をうけ、最後の二隻も夜明けになって飛行機で沈められた。

2月2日から15日までの間、第十五及び第十六戦隊の残部が散発的な攻撃を繰り返し、また第十一戦隊もマニラ南方のテルナテ地区から一部の艇で攻撃したが、戦果は未確認であった。

沖縄における特攻作戦

米連合遠征部隊は、スプールアンズ海軍大将の率いる一、五〇〇隻の艦艇と圧倒的航空支援のもと、第十軍司令官S・B・バクナー陸軍中将指揮の二十四万の上陸部隊をもって、昭和20年4月1日、沖縄本島西部の嘉手納海岸に、上陸作戦を展開した。

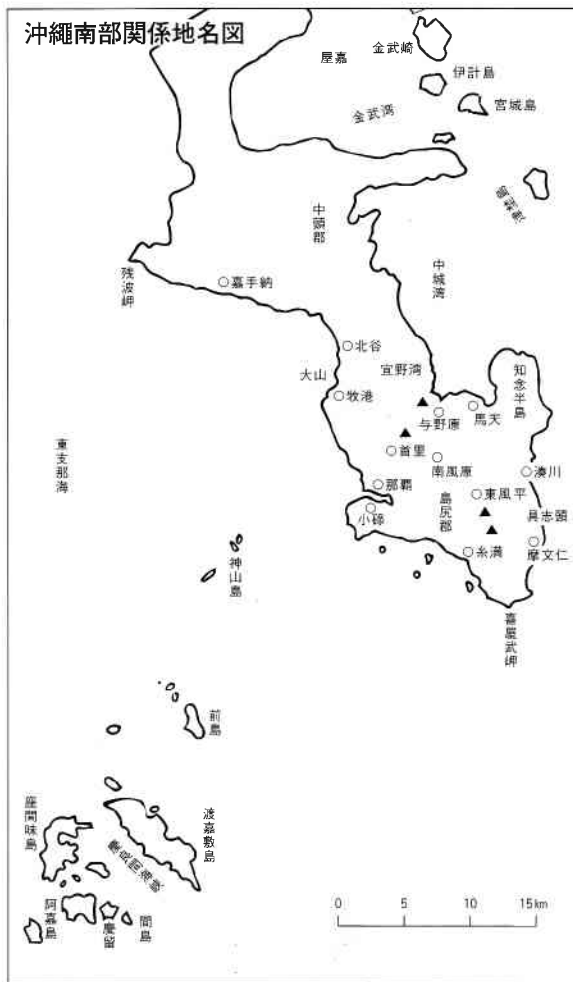
これに先だち、本島西南方の慶良間海峡は、米軍にとり恰好の洋上補給と艦艇修理の基地であるため、これを重視した攻略部隊は、第七十七歩兵師団をもって、3月26日攻撃を実施した。慶良間列島には、①部隊の第一乃至第三戦隊が展開し、敵上陸部隊の泊地侵入後、その背面から攻撃する計画であったが、出撃の条件未完のまま不意の急襲をうけた。そのうえ各海上挺進基地大隊は、沖縄本島から他に転用された第九師団の後詰め部隊となり、その一部を残置して主力は既に本島に転進しており、対上陸作戦能力は微弱になっていた。ここにおいて第三十二軍は作戦全般に及ぼす影響を顧慮し、三コ戦隊に対し①艇の破棄を下令した。

時あたかも慶良間列島所在②部隊の戦備状況を視察中であった軍船舶団長大町茂大佐一行は、急遽軍指令部に帰還するため、自

沈を免れた第三戦隊の②二隻に分乗して出発したが、大町大佐の艇は洋上で消息を絶った。一方第二戦隊の第一中隊は、慶良間列島中の慶留間島に分駐していたが、3月28日未明、大下真男中隊長(陸士57)以下十六名が、①四隻に分乗し出撃を敢行し、慶良間海峡で米駆逐艦一隻を撃沈、輸送船二隻を撃破したとの戦果が報告されたが、米軍側の記録では、攻撃をすべて撃破し実質的な被害は無かったとなっている。

敵上陸部隊は、沖縄本島上陸に先立ち、上陸正面と運天港の特殊潜航艇および海上挺進攻撃基地を徹底して制圧した。この砲爆撃に耐え、3月29日第二十九戦隊の第一中隊長中川康敏中尉(陸士56)以下十七名が、十七隻の①を泛水し北谷西方の米艦船を攻撃し、中型艦一隻を撃沈し二隻を撃破した。この攻撃で十六名が戦死した。米軍の資料によれば、「①はエンジンの騒音と月光に照らされた航跡の夜光虫とで発見され、激しい砲撃で輸送船に接近出来ない状態であったが、一隻が砲火を突破し五二〇噸のLSM12に衝突、船は中央に大穴をあけられ、応急修理で持ちこたえたが、4月4日沈没した」と記録されている。

糸満付近に展開していた第二十六戦隊は、4月7日(米軍資料では4月9日)船舶工兵第二十六連隊の神山島の米軍砲兵陣地への斬込みに応じ、軍命令にもとづき第一中隊二十隻が出撃、第三中隊は岸本具郎中隊長(陸士57)以下二隻がこれに連繋して攻撃を実施し、駆逐艦一隻輸送船二隻を撃沈したほか火柱三を望見することが出



来た。米軍資料によれば、「4月9日3時、㊦隊は基地より暗夜を

ついて出撃した。4時二、〇五〇噸の駆逐艦チャールズ・J・バツジャーは、海岸砲撃任務を完了したあと停泊中、暗闇の中から㊦艇の攻撃をうけて犠牲となった。バツジャーが射撃を始める前に爆雷を投下し闇の中に消えた。爆発により機関室に大浸水が起こり、戦死者は出なかったが、艦は浮力を保てなくなり、慶良間海峡まで曳航擱座し、再び戦闘に参加し得なかった。駆逐艦パァディは、集中砲火で㊧の接近を阻止し、そのため投下爆雷は遠くて被害をまぬがれ、六、三一八トンの攻撃輸送船スターも至近爆雷を受けたが、被害はなかった。中型揚陸艦L S M 89は体当たり攻撃を受けたが、被害は軽微であった。また駆逐艦ポーターフィールドも被害を受けた。㊨の攻撃にたいする射撃のため、各艦はしばしばお互いの流れ弾により被弾した。㊩艇が全部沈められても、泳いでいる生存者が手榴弾をもって攻撃してくるので、射撃を続けねばならなかった」と記されている。

4月10日、第二十六戦隊第二中隊野田耕平見習士官以下十名が、各個攻撃を実施し、全員が帰還したが、戦果は不明であった。4月15日第二十六戦隊長足立陸生大尉(陸士53)以下二十二隻が、嘉手納西方海面の米軍艦艇を攻撃し、駆逐艦一隻艦種不詳一隻を撃沈、艦種不詳三隻を炎上させ、そのほかに火柱六を報告した。同日付の米軍資料によれば、機雷掃海艇Y M S 31が㊪の攻撃で大破したとなっている。

4月26日、第二中隊は十五隻をもって出撃準備したが、砲撃及び不測の誘発事故により出撃不能となり、中隊長及び他の一艇の

みをもって駆逐艦を攻撃した。4月27日第一中隊は十二隻をもって嘉手納沖の艦船を攻撃し、輸送船一隻、駆逐艦一隻を撃沈したと報告された。

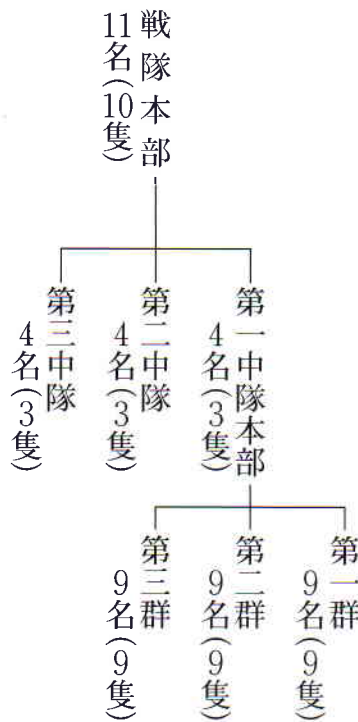
第二十八戦隊は、4月27、28日夜、第三中隊長小林浩三少尉(陸士57)の指揮する二コ群(二十三隻)で、具志頭付近から中城湾に出撃したが、戦果は不明であった。米軍資料では、「4月27日中城湾において一隻の㊫艇が、二、〇五〇噸の駆逐艦ハッチンズを吹き飛ばした。㊬艇の体当たりにより、艦は数フィート飛び上がり左舷のエンジンとスクリュー軸が破損し、十八名が負傷し艦は終戦まで使用不能となった。また二日後に、ロケット砲艦L C S 37は、体当たり攻撃をうけ艦は大破した」と記録されている。

5月3日の第三十二軍の総攻撃にあたって、戦線左翼西海岸正面では、第二十七戦隊第一中隊、第二十八戦隊の主力及び第二十九戦隊の一部をもって、船舶工兵第二十六連隊の兵員を乗せ、那覇港を発し大山付近に逆上陸を実施し、右翼東海岸正面では、第二十七連隊の第二・第三中隊約二十隻をもって、中城湾および勝連半島付近の輸送船団を攻撃し、駆逐艦一上陸用舟艇二、大型輸送船三を撃沈した。この戦闘で、戦隊長岡部茂己少佐(陸士52)以下二十三名が戦死した。

5月中旬、第二十八戦隊は川島見習士官以下六隻で嘉手納沖に、5月23日麻生少尉以下九隻で嘉手納及び那覇沖に出撃、27日には第二十七戦隊の第一中隊が残存全艇で出撃を行ったが、戦果は確認されなかった。この出撃をもって海上挺進作戦は終了し、残存の戦隊員は陸上戦闘に参加、その殆どが戦死をとげた。

陸軍海上挺進戦隊の編制

海上挺進戦隊は、戦隊長以下一〇四名、㊦一〇〇隻をもって編成した。戦隊は戦隊本部(戦隊長以下十一名)と三コ中隊(中隊長以下三十一名)からなり、更に中隊は中隊本部(中隊長以下四名)および三コ群(各九名)とからなり、戦隊を戦術単位、中隊を戦闘単位とし一コ群(九隻)を行動の最小単位と定めた。各艇乗員一名但し戦隊長及び各中隊長艇のみ指揮艇のために、複座方式とした。また部隊装備として自動小銃四挺、各戦隊員はそれぞれ拳銃(26年式・弾丸六発)と軍刀(40年式)を装備した。

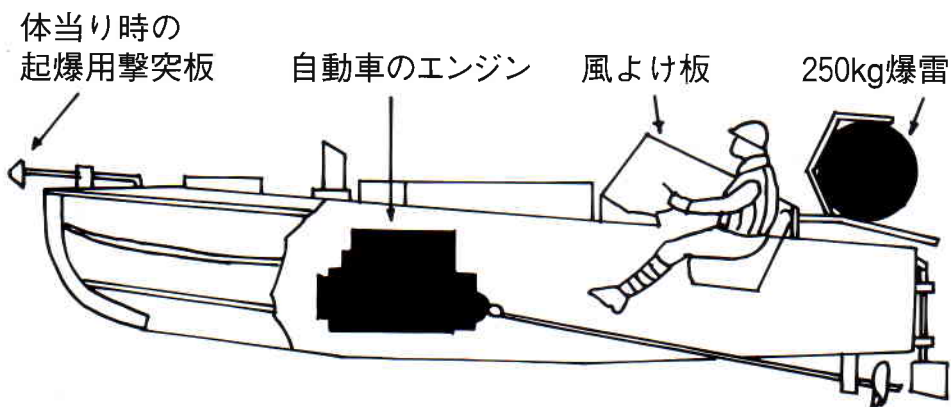


動員及び配備

昭和19年9月1日から中旬にかけ、江田島町幸ノ浦において第一〜第十戦隊が編成を完結し、ついで10月上旬から下旬の間に第十一〜第三十戦隊の編成を完結した。

このほか、本土決戦準備のため、更に第三十一戦隊から第四十戦隊まで及び第五十一、第五十二戦隊が編成を完了して展開した。また第四十一乃至第五十戦隊および第五十三戦隊は仮編成のうえ訓練中に終戦を迎えた。

(秘匿名称・連絡艇㊦艇)



長さ5.6m, 幅1.8m, 排水量1.5トン, 最大速力20~25ノット, 航続時間3.5時間, 250kg爆雷1個装備, 艇はベニヤ板製。



昭和16年12月8日、日本は米英に對し宣戰を布告し、大東亜戦争に突入した。開戦初期、日本はハワイ真珠湾、マレー、シンガポール、作戦等で戦果を挙げたが、昭和17年6月のミッドウェー海戦において、航空母艦の大半を失い、その後戦況は逆転の様相を呈してきた。

その時、イギリスの植民地支配からの独立を願い、チャンドラ・ボースが日本に支援を要請してきた。日本軍はインド国内の反イギリス独立勢力の支援と、混迷する戦局の打開を計るべく、第31師団「烈」、第33師団「弓」、第15師団「祭」、そして国内の要衝インパールの奪取を目指した。作戦はこの三師団の他に、チャンドラ・ボース統率下のインド人志願兵一万五千人からなるインド国民軍(INA)も勇躍参加した。

3月から始まった作戦は、河幅600Mにも及ぶチンドウイン河の奇襲渡河、そして2000Mの難關を克服し、「弓」の進撃にあわせ、「祭」の挺進隊はミッシオンを占領、インパール周辺を遮断、さらに「烈」もコヒマを占領し、コヒマ、モイランそしてインパール周辺にまで日本軍は進出した。

インド国民軍も「烈」と「弓」の両兵团と行動をとるに、コヒマとモイランに進出。

インパール作戦の概要

インパール作戦に参加した日本軍	約 78,000人
インド国民軍	約 15,000人
戦没者	
日本軍	約 49,000人
インド国民軍	約 3,000人



い N を
 。 A も
) の そ
 の て れ
 英 戦
 霊 つ の
 を た 国
 私 、 と
 たち 家
 は 族
 を 思
 ん う
 こ 純
 と 粋
 は 心
 出 信
 来 念
 な I

の ず イ 相 ギ 員 つ い を し 逆 た 死 豪 6 も い 戦 内
 で か シ 当 リ の た た つ た 者 イ 戦 ・ 雨 月 に 、 線 し に 遂
 あ る 2 の 年 も 齊 特 と た 、 と ド イ 病 中 つ 絶 攻 膠 反 是 翻
 。 後 の 独 月 事 反 乱 こ 。 こ し 国 ギ 死 の い し を 着 、 ギ の 願
 昭 は か 収 が ィ 官 運 と 3 は 、 一 す こ 撤 退 の そ え 更 に ス 有
 和 、 か 拾 る 困 え ス 憲 動 が 名 、 イ の 将 校 の を 全 民 刑 け 帝 対 参
 22 パ キ で 難 と 影 軍 衝 突 、 ド の 流 血 土 衆 の 怒 り そ う と 反
 年 8 ス タ ろ 考 響 は 属 の 血 土 衆 の 怒 り そ う と 反
 月 15 シ ン と 言 わ れ て 讓 渡 、 イ 組 な 、 火 と
 日 に 達 成 さ 戦 後 た

の ず イ 相 ギ 員 つ い を し 逆 た 死 豪 6 も い 戦 内
 で か シ 当 リ の た た つ た 者 イ 戦 ・ 雨 月 に 、 線 し に 遂
 あ る 2 の 年 も 齊 特 と た 、 と ド イ 病 中 つ 絶 攻 膠 反 是 翻
 。 後 の 独 月 事 反 乱 こ 。 こ し 国 ギ 死 の い し を 着 、 ギ の 願
 昭 は か 収 が ィ 官 運 と 3 は 、 一 す こ 撤 退 の そ え 更 に ス 有
 和 、 か 拾 る 困 え ス 憲 動 が 名 、 イ の 将 校 の を 全 民 刑 け 帝 対 参
 22 パ キ で 難 と 影 軍 衝 突 、 ド の 流 血 土 衆 の 怒 り そ う と 反
 年 8 ス タ ろ 考 響 は 属 の 血 土 衆 の 怒 り そ う と 反
 月 15 シ ン と 言 わ れ て 讓 渡 、 イ 組 な 、 火 と
 日 に 達 成 さ 戦 後 た



インド国民軍退役軍人からの便り



「日本はインドにとっては良い国だと思います。日本はチャンドラ・ボースと共にインドの独立のため戦ってくれました。これは、はっきりいえます。インドは日本軍の犠牲により独立することが出来たのです。もしあんなに犠牲者を出さず、又 I N A（インド国民軍）に協力しないでインドに進出した場合、インドの軍（イギリス軍インド部隊）は自分たちの方針を変えなかったでしょう。25万のインドの軍が方針を変え、チャンドラ・ボースの軍になったことによりイギリスから独立することが出来たのです。」

「私たちは常に日本に対し感謝の気持ちを持っています。」

「最後にもう一度、有難うございました。」 — デロン中佐の言葉 —

太陽の光がこの地上を照すかぎり、
月の光がこの大地を潤すかぎり、
夜空に星が輝くかぎり、
インド国民は日本国民への恩は
決して忘れない。

P・N・Lekhi

（インド最高裁弁護士）



ALL INDIA INA COMMITTEE
INDIAN NATIONAL ARMY
(ESTD-1945)
82, DARVA GANJ, DAYANAND MARG, NEW DELHI - 110 002, PHONE : 3275552

apt. S.S. Yadava, I.N.A.
General Secretary

WE THE MEMBERS OF THE INDIAN NATIONAL ARMY PAY
OUR HIGHEST AND MOST REVERED TRIBUTES TO OUR
COMRADES-IN-ARMS MEMBERS OF THE JAPANESE
IMPERIAL ARMY WHO LAID DOWN THEIR LIVES ON THE
BATTLE FIELDS OF IMPHAL AND KOHIMA FOR THE
LIBERATION OF INDIA. THE INDIAN NATION WILL EVER
REMAIN GRATEFUL TO VALIANT MARTYRS OF JAPAN AND
WE PRAY FOR ETERNAL PEACE OF THEIR SOUL.

S. S. Yadava
S.S. YADAVA
Capt. I.N.A.
Gen. Secretary

（訳文）

われわれインド国民軍将兵は、インドを解放するために共に戦った戦友としてインパール、コヒマの戦場に散華した日本帝国陸軍将兵に対してもっとも深甚なる敬意を表わします。インド国民は大義のために生命を捧げた勇敢な日本将兵に対する恩義を末代にいたるまで決して忘れません。我々はこの勇士たちの霊を慰め、御冥福をお祈り申し上げます。

1998年1月20日 於 ニューデリー

インド国民軍大尉 S. S. ヤダバ

（インド国民軍全国在郷軍人会代表）

しゅむしゅとう たたか 終戦3日後の攻防……占守島の戦い

きた ち しま
北千島最北の島での日ソ両軍の
せいんとう い ぎ
激しい戦闘の意義とは



せんしの ざんがい
今も残る戦車の残骸と、その後ろに立つ「北千島関係戦没者の霊」の白い墓標

しゅむしゅとう たたか 占守島の戦いとは

日本が終戦を迎えた昭和二十年八月十五日から三日経った八月十八日に、天皇の詔勅に従い武装解除を進めていた、千島列島最北端の島『占守島』の日本軍に対し、ソ連軍が突然上陸、攻撃をかけてきた戦いのことです。

日本軍は一度解除準備を進めていた武装を改めて行い、峻烈な激戦の末にソ連軍を水際に追いつめ、まさに殲滅しようとした時に「戦闘を停止し、自衛戦闘に移行すべし」との方面軍命令があり、日本軍は命令に従い、軍使の派遣・停戦交渉・武器引渡し交渉の末、再度の武装解除を行い、戦いは二十一日に終結し、ソ連軍の南下は二十四日以降になりました。

ソ連は日本のポツダム宣言受諾、降伏を知りながら、なぜ終戦後三日も経ってから戦争を仕掛けてきたのでしょうか？それは当時のソ連の首相であったスターリンの領土拡張方針に基づく北海道北部の占領計画にあったと思われる。「占守島は一日で占領する」と豪語していたソ連軍を占守島の日本軍は一週間も足止めし、ソ連軍の南下を遅らせ北海道北部の占領計画を阻止した結果にもつながったのです。

わたしたちは、家族と国を思う純粋な心と信念をもって、終戦三日後に戦って逝った占守島の若者たちのご冥福を祈るとともに、彼らのことを決して忘れることは出来ません。

占守島の戦いの経過

「幌筵海峡周辺地区及び占守島の要域確保」を命じられていた第五方面軍第九十一師団は、数倍の米軍を想定し、かの敵に強靱・執拗な戦闘を挑むべく、陸海軍あわせて二万五千名の配備を行っていました。

占守島の電波状態は極めて悪く、八月十五日の天皇陛下の終戦の詔勅を多くの部隊では聞くことは出来ませんでした。翌十六日に師団参謀立会いの下に終戦が伝えられ、十七日から日本軍は武装解除の準備に取りかかっていました。戦車部隊でも車載銃砲や無線機の取り外し、爆砕と車両の海没の準備まで進めていました。

しかし八月十八日の未明に、対岸のロパトカ岬のソ連軍から長射程重砲の砲撃が始まり、国端崎の監視所からも「海上にエンジン音聞ゆ」と至急の連絡も入ってきました。降伏に関する軍使ならば夜中に来ることはありません。「これは危ない」と判断した日本軍は、島一面が濃霧に包まれた中、急ぎ戦闘配備を整えました。その間にも「敵輸送船団らしきものを発見」「敵上陸用舟艇を発見」「敵上陸、兵力数千」と相次いで急報が入ってきました。

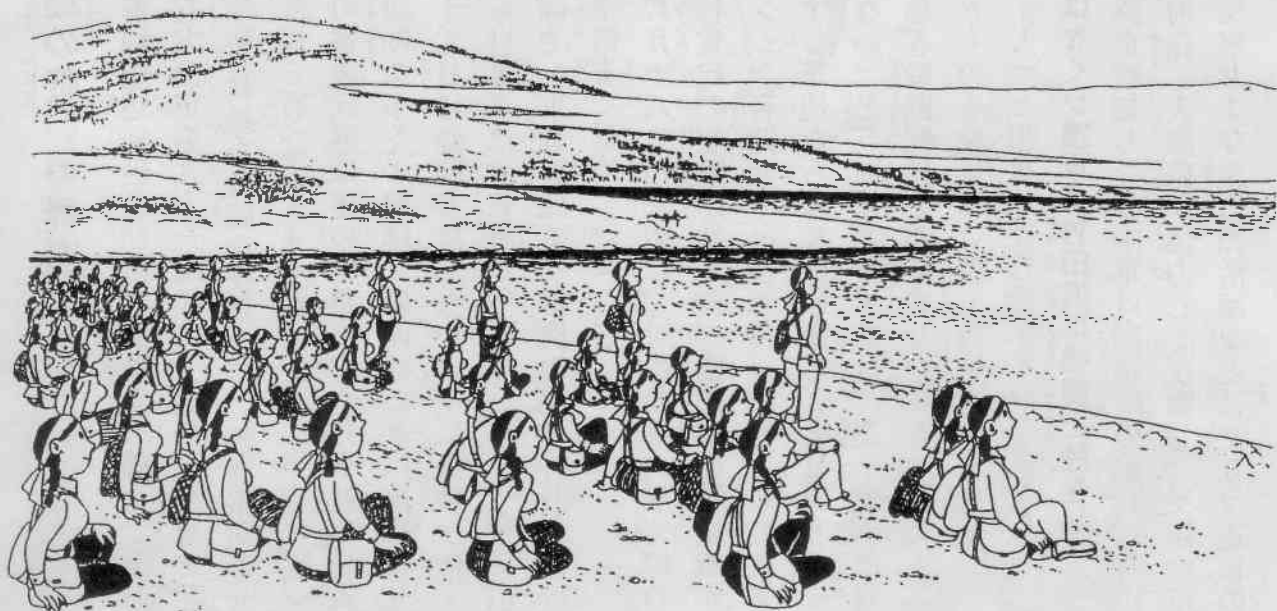
米軍ではなくソ連軍が竹田浜に強襲上陸をして来ました。

敵の上陸を察知した日本軍は国端崎の砲兵、竹田岬と小泊崎の速射砲・大隊砲が協力して反撃し、又陸海軍航空機の決死の反撃および重砲の活躍などによりソ連軍の指揮系統

は大混乱に陥りました。しかしソ連軍の一部は艦砲射撃の支援を受けながら十八日の六時ごろには四嶺山に進出して、激しい戦闘が展開されました。

日本軍は戦車連隊の参加もあり、次第に敵ソ連軍を圧迫し海岸付近に釘付けして、一歩も内陸に前進させず、一挙にソ連軍を殲滅する体制を整えました。しかしこの戦闘のなかで戦車連隊長、同連隊指揮班長をはじめとして各中隊長以下多くの戦死者も出ました。その頃に「戦闘を停止し、自衛戦闘に移行」との第五方面軍からの命令が届き、占守島の第九十一師団は、ソ連軍の攻撃はまだ続いています。が軍使派遣、停戦交渉と進め、八月二十一日に漸く戦いは終わりました。その後、武装解除が二十三日と二十四日に行われました。

この激闘で一説には日本軍の死傷者は七百名、八百名におよび、ソ連軍は三千名以上の死傷者を出したと伝えられ、ロシア研究者のボリス・スラヴィンスキーの著書によれば日本側死傷者は一、〇一八名、ソ連側死傷者は一、五百六十七名となっています。ソ連政府機関紙のイズベスチアは「占守島の戦いは満州、朝鮮における戦闘よりもはるかに損害は甚大であった。八月十九日はソ連人民にとって悲しみの日である」と述べているのです。



占守島第九十一師団の心遣い しゅむしゅとう くにちづか

終戦の時に、占守島には日魯漁業の従業員の方が二千五百人ほどいました。この人たちは国民の食糧確保の為に悪い戦局を承知で、缶詰工場で働いていましたが、その中には約四百人の若い女子工員も混じっていました。終戦を迎え、内地からの迎えの船が来れば真っ先に彼女たちを送り返す手筈を整えているところへのソ連軍の攻撃でした。

参謀長と世話役の大尉は「このままでは必ずソ連軍に陵辱される被害者がでる。なんとしてもあの娘たちを北海道へ送り返そう」と相談し、当時島にあった独航船二十数隻に約四百人を分乗させ、霧に覆われた港から北海道に向けて出港させました。ソ連機の爆撃が続く中、日本軍も高射砲の一斉射撃で必死の援護を行い無事に出港させることが出来たのです。

「全員、無事に北海道に着いた」との電報が島に届いたのは、それから5日後でした。停戦後に上陸してきたソ連軍は女性を捜し回ったようですが、あとの祭りでした。

もし、彼女たちがいち早く島を出ることが出来なかったことを想像すると、占守島の第九十一師団の心遣いが人ごとでなく心にしみみます。

人間魚雷 回天

菊水隊の攻撃により爆発炎上するミシシネワ
昭和19年11月20日ウルシー環礁内

全国回天会

兵器『回天』

『回天』は人間魚雷である。当時、我が海軍が高性能無航跡魚雷と

して世界に誇る『九三式魚雷』をエンジンとして、頭部に一、五五トンの炸薬を装着し、潜入・浮上・転舵自在、搭乗員自ら操縦の一人乗りの兵器である。文字通り一身肉弾となって敵艦船に体当たり、一撃もつて敵艦を必沈する兵器であった。

昭和19年11月8日、伊36・37・47の三潜水艦を母艦として、各艦に回天4基計12基、搭乗員12名をもつて編成した「菊水隊」が、ウルシー環礁、パラオのコツスル水道在泊敵艦船攻撃のため、徳山湾大津島基地を出航した。これが回天特別攻撃隊最初の出撃である。

終戦直後、米軍との連絡のため、フィリピン・マニラに赴いた日本軍使に対し、マッカーサー司令部のサザランド参謀長は、開口一番「回天を搭載し作戦中の潜水艦は何隻か。直ちに作戦を停止させよ」と命じた。このことは、『回天』が如何に米軍に恐怖と脅威を

与えていたか、を物語る証左と言えよう。

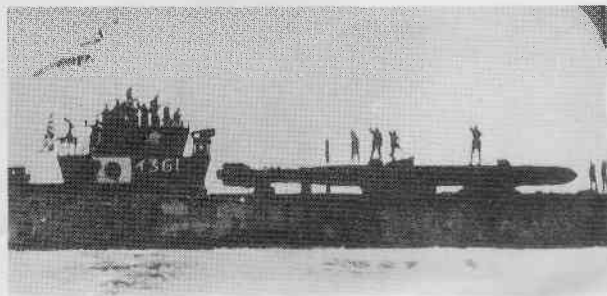
『回天』の誕生

開戦当初赫々たる戦果をあげた大東亜戦争も、昭和17年6月ミッドウェイ戦での挫折、

18年初めのガダルカナル島撤収、山本五十六連合艦隊司令長官の戦死、アッツ島守備隊の玉砕等々戦局は憂慮すべき展開となった。こ

うした状況下で戦局打開のため、新兵器、新戦法の研究・開発・献策が青年士官から相次いだ。

昭和18年呉港外倉橋島にある基地で特殊潜航艇艇長



壮途に上る回天特別攻撃隊

講習員であつた黒木博司中尉（海機51期）と仁科関夫少尉（海兵71期）は、人間魚雷を兵器に採用するよう再三上申、時には血書をもつて嘆願した。しかし、この兵器は必死の故をもつて上層部の容れるところとならなかつた。

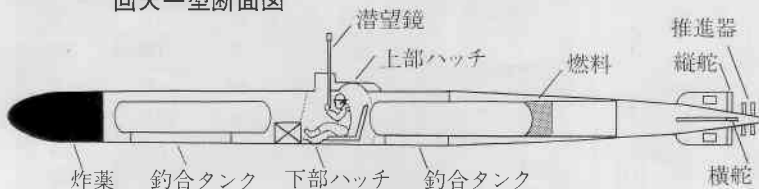
昭和19年に入るやいよいよ戦局が悪化、我が艦艇の損耗も甚大、ようやく特攻兵器の開発が許可され試作が命ぜられた。

この必死兵器が正式に採用されたのは昭和19年8月1日であつた。人間魚雷『回天一型』の誕生である。命名は黒木大尉（進級）の提案によるものである。

回天隊の作戦

必死必中体当たりで敵艦を斃す回天は、潜水艦を母艦に、最初泊地攻撃作戦を決定、昭和20年4月航行艦襲撃の洋上作戦に、さらに戦局の緊迫化に伴い3月以降には国土防衛のため、沖縄・八丈島等各地に防衛基地回天隊を配備し、邀撃作戦を展開した。概要は次の通りである。

回天一型断面図



回天一型改一主要目表

全長	14.750m	航続力 kt / km	10kt 78km
直径	1.000m		20kt 43km
全重量	8.30 t		30kt 23km
炸薬	1.55 t	機関	93式酸素魚雷
搭乗員	1 名	燃料	酸素及び灯油

泊地作戦に、菊水・金剛の2隊36基。洋上作戦に、千早・神武・多々良・天武・振武・轟・多聞・神州各隊の8隊112基。防衛基地回天隊として、第1・2・3・4・5・6・7・8・9・11・12・16回天隊の1296基。計244基の回天が投入されている。

回天基地の開設

昭和19年9月1日、魚雷試験発射場のあつた大津島を適地として訓練基地が開設、5日から訓練開始された。訓練2日目の6日樋口孝大尉（海兵70期）操縦、黒木大尉同乗で訓練中、回天が海底に突入殉職、尊い犠牲者を出しての訓練となった。訓練基地は次のように開設された。

大津島基地（現山口県徳山市大津島）

昭和19年9月1日開始 9月5日訓練開始

光基地（現山口県光市光井）

昭和19年11月25日開始 12月1日訓練開始

平生基地（現山口県熊毛郡平生町田名）

昭和20年3月1日開始 4月17日訓練開始

大神基地（現大分県速見郡日出町深江）

昭和20年4月25日開始 5月23日訓練開始

搭乗員・戦没者

出 身	搭乗員	戦没者
海軍兵学校	89	19
海軍機関学校	32	12
学徒出身	210	26
一般兵科	9	9
甲種飛行予科練習生	935	40
乙種飛行予科練習生	100	0
計	1375	106

た。概要は右表の通りで、戦没者数には終戦直後自決した士官2名が含まれている。なお回天作戦に参加し未帰還の潜水艦8隻、その乗組員は810名である。

搭乗員はすべて志願によつた。一般兵科からも募つたが途中で打切られ、殆どが兵学校・機関学校・予備学生・生徒・甲乙飛行予科練習生であつた。年齢も17才から高齢者で28才、大多数は20才前後の若者であつ

全国回天会

事務局 〒134-0085 東京都江戸川区南葛西七-1-6 四〇四
電話 〇三（三六八〇）三七二八

遊就館



本券は表示されている日の入場一回限り有効です。
本券の払い戻し及び再発行は原則としていたしません。
本券をもって領収書にかえさせていただきます。

—— 注意事項 ——

- 館内での写真・ビデオ撮影・録音はお断りします。
- 館内は禁煙とさせていただきます。
- 飲食物・ペット・危険物の持ち込みはお断わりします。
- 他の拝観者の迷惑となる行為は禁止します。
- 不審者・不審物を見つけたら速やかにお近くの係員にお知らせください。

遊就館

〒102-8246 東京都千代田区九段北 3-1-1
電話 03-3261-8326 ファックス 03-3261-0996
<http://www.yasukuni.jp/yushu/index.html>

H18.08 1F

0400000562

入館券
大人

800円

